

# 深イ～話！

No.162

— 「婦人公論」読者体験手記より —

未来を拓いた“あの人”との出会い・・・山川宏美（大阪府 55歳）

私が2歳の時、両親が離婚。母との二人暮らしが始まるも、生活は不安定でした。母は常にイライラしていて、些細な<sup>ささい</sup>ことで怒り、私は怯えて<sup>おび</sup>過ごしていた記憶があります。

父とは月に1度面会していました。でも私に会うというのはただの名目で、母にお金を無心するのが本当の目的だったようです。父は金銭トラブルを抱えており、お金が絡むと見境がなくなる人だったと、母が言っていました。

断片的ではあるものの、幼い頃の記憶は私のなかに強く残っており、その後も大きな声や威圧的な態度をとられると萎縮したり、動悸がしたりするなど深い傷を残したのです。

離婚して1年も経たずに、母は私を児童養護施設に預けました。大きくて広い建物が怖く、また集団生活に馴染めない私は、不安に押しつぶされそうになりながら寂しく過ごしていたことを覚えています。

しばらくすると、父が突然私を引き取ると言い出し、施設から強引に連れ出しました。父はこの時、女性関係でトラブルを起こし、裁判沙汰になっていたそうです。そこで考えたのが、子どもの養育を理由に情<sup>じょう</sup>状<sup>じょう</sup>酌<sup>しゃく</sup>量<sup>りょう</sup>をしてもらうこと。私を育てる気などはなからないため、裁判が終わると、再び私を宮崎県にある別の児童養護施設へ預けたのです。

ここでも寂しい思いをしながら過ごしていると、施設の提案で里親制度を利用することになりました。里親制度とは、親の病気、虐待、貧困などさまざまな理由で親と一緒に暮らせない子どもたちの社会的養護のために、里親登録を行った家庭で養子縁組や養育を受けるといったもの。里親の家で体験宿泊し、互いに承諾すると、里親の元での暮らしが始まるという流れです。

さっそく1軒目の里親の元で体験宿泊を行い、とんとん拍子で委託されることになりました。しかし、なぜかすぐに児童養護施設へ戻ることに。2軒目、3軒目も同じで、委託が決まっては戻されてを繰り返すことになったのです。まだ3歳だった私は、お泊りごっこをしているくらいにしか理解していなかったものの、冷たい雰囲気施設のよりも、人の家の温かさのほうがいいなと感じていたのに・・・。

施設に戻される原因は父でした。里親が決まるたびに父がその家を訪ねていき、難癖をつけて金銭を要求していたのです。里親は驚きと恐怖で委託解除していたのでした。

けれど私が4歳になった時、奇跡のような素晴らしい里親さんとの出会いがあったのです。

父もまた、例によって家を訪ねてきたそうです。しかし、里親さんは、これまでの父の素行を知ったうえで、「私たちまでもが施設へ戻ってしまったら、宏美ちゃんの人生はどうになってしまうのか。考えると心配で眠れない。見守りながらしっかり育てたい」と思ってくれたのでした。

こうして、ようやく私は安全で安心な場所にたどり着いたのです。

里父、里母ともに50歳で、実子3人は成人し、すでに自立していました。2人が私を本当の家族として育ててくれた日々は奇跡そのものでした。

私は初めて、家族で食卓を囲み、無条件に愛される喜びを知ったのです。

田舎という土地柄、近所の人たちにさまざまな噂をたてられていたと大人になってから聞きました。実父も相変わらず忘れた頃に訪ねてきては金銭を要求していたようですが、屈せずに私をずっと守って育ててくれた里親さんには感謝しかありません。

里親さんのおかげでのびのびと子どもらしい日々を送っていましたが、私が10歳になった時、実母が「会いたい」と児童相談所をとおして連絡してきたのです。戸惑う私の気持ちに関係なく、面会が決まり、再会する日を迎えました。実母は駆け寄ってきて「ごめんね」と泣いていましたが、私はというと、母の顔をまったく覚えていません。

その後、実母との面会頻度は増えていき、私が12歳になった時に実母と暮らすことに。私に愛情をたっぷりかけて育ててくれた里母さんは、親権を理由に引き離されてしまう結果となりショックで寝込むほどだったようです。

私は動揺しながらも、実母と新たに親子としてやり直そうと前向きに考えることにしました。けれど、実母の性格の根本的な部分は変わっておらず、暮らし始めて半年も経たずに些細なことで逆上し、「一切あんたの食事の世話はしないから！」と言い放ち、本当にそうしたのです。

けれど、運は私を見放していませんでした。多くの場合、里親関係を解除した後に連絡を取り合うことはないのですが、里親さんは私が離れた後も気にかけてくれ、時に家に立ち寄ってくれたり、段ボール箱いっぱい食べ物詰めて送ってくれたり、手紙や電話をくれたりしたのです。それは私が結婚してからも続きました。

どんなに悲しいことがあっても、大変な状況になっても、見守り思ってくれている人がいる。

その事実が私の心を救い、強くしてくれました。私の生い立ちから「苦労したね」と言われることがありますが、私は今、心の底から「いいえ、幸せです」と言えます。

